

横浜市寿地区ドヤ街の研究

三浦洋平、大島康平（指導教員 八尾廣）

1 はじめに

神奈川県横浜市中区にある簡易宿泊所が密集する地域であり人口 6301 人、簡易宿泊所数 122 軒、8685 室（平成 19 年度）となっている。寿町の中心部は極めて高密度にドヤによって占められており、その隙間に小規模の飲食店や商店、生活に必要なコインランドリーなどが分散配置されている。また簡易宿泊所が密集する地域の事をドヤ街と呼び、この寿町と大阪の釜ヶ崎、東京の山谷とで日本三大ドヤ街と呼ばれている。本研究は横浜の中で異質なドヤ街・寿町の知られざる実態を掴むことを目的とするものである。



図1 寿地区とそのドヤの配置



写真1 ドヤ

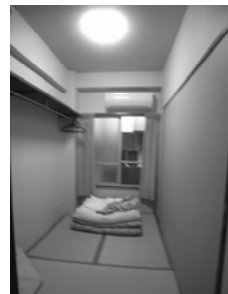
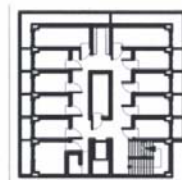


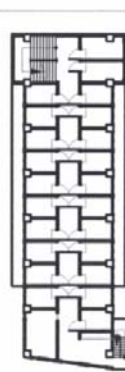
写真2 ドヤ内の一室



(水明荘)



(新栄館)



(林会館)

図面1 実測調査を行ったドヤの全体平面図 1/600

2 寿地区の現況調査

2.1 街の現況

(1) ドヤ

「ドヤ」とは「宿（ヤド）」を逆さ読みしたもので、劣悪な環境から宿に値しないというところから来ている。正式には「簡易宿泊所」と言い、宿泊する場所を多人数で共用する構造および設備を設け、宿泊料を受けて人を宿泊させる営業で下宿以外のものを指す。一般のホテルや旅館と比較して料金が安いのが特徴で半数以上が¥2100～¥2300 を設定している。これは生活保護で住宅費に当てられる一日の上限が¥2200 の為に多くの簡易宿泊所がこの金額に焦点を当てている。

個室の広さは平均的に3畳ほどでキッチン、トイレは共同、風呂は設置されていない。寿地区のほとんどのドヤは個室形式、鉄筋コンクリート造である。また住人の高齢化に伴い、近年ではバリアフリー化したドヤも出来つつある。

(2) 街路

路上では世間話をしたり、囲碁・将棋をしたり、昼間から酒を酌み交わしたりといった光景が見られる。そのほとんどが高齢者で尚かつ男性である。高齢者でなくとも過酷な日雇い仕事の肉体労働で大きな怪我をした者、身体を酷使して高齢化と共に不自由な体となってしまった障害者の方も多い。



写真3 世間話する人々



写真4 不法駐車が多い路上

街路には多くの路上駐車が確認出来る。しかしこれらの中には暴力団関係と思われるような車も多くある為に以前から警察も寿地区内に関しては取り締まりを行わないという経緯があり、現在に関しても同様である。その他不法投棄の問題、路上で用を足す人がいる為に漂う臭気など、それらが寿町の負のイメージを形作っている。

(3) センター

日雇い労働で生活する人に仕事を紹介すると共に、娯楽室や図書室、屋外の広場や大階段などの公共施設を備えた寿地区の中心となる施設である。自力で働ける人の他にも生活保護受給者、ホームレスの人々など様々な人が利用する為、時間帯によって異なる顔を見せる。

(4) 公園

寿公園は寿町3丁目の位置的には寿地区の中心に位置する。ドヤの住人にとっては体操など軽い運動をする場でもあり、酒を酌み交わす宴会場でもある。一方で幼児から中学生まで幅広い年齢層の子ども達も遊んでおり、この地域に良好な雰囲気を与えている。また、向かいにあることぶき保育園の運動会も催される。



写真5 公園で運動する人 写真6 公園で遊ぶ子ども

(5) ことぶき保育園

寿地区には二つの保育園が存在する。どちらも寿地区の中心エリアに位置する。

若年層が少ないにも関わらず、児童数が少なくないのは寿地区在住の韓国籍児童や近隣の中華街の児童、伊勢佐木町に出稼ぎに来ている外国人の児童多いからである。

(6) 居酒屋・飲食店

スナックはまた明るい時間帯から営業している店が多く、昼間からカラオケの音が漏れている、逆に深夜まで営業しているような店はあまり見られない。

(7) さなぎ食堂

さなぎ食堂は、NPO法人「さなぎ達」の行っている活動である。単身で高齢者の多い街の中で3食のご飯を提供するだけでなく、生活習慣病へのサポートも行っている。

(8) 違法賭博所

基本的に暴力団関係によって営業されている。内部は競馬、競輪、競艇などのテレビ中継が流れていて、それらが賭けの対象となる。警察の取り締まりも緩く、一斉取り締まりは行われない。

(9) コインランドリー・コインシャワー

古いドヤではコインランドリー・シャワーが設置されているところは少なく、比較的新しいドヤに併設されて外に対して開いているところを利用する。ランドリー前では洗濯待ちによって自然と人が滞在する様子が見られる。



写真7 コインシャワー 写真8 ランドリー前に集う住人

2.2 データから見る寿地区

現在、労働市場機能は後退して生活保護受給者数、高齢者の増加により過去の日雇い労働の街から福祉ニーズの高い街に変化している。

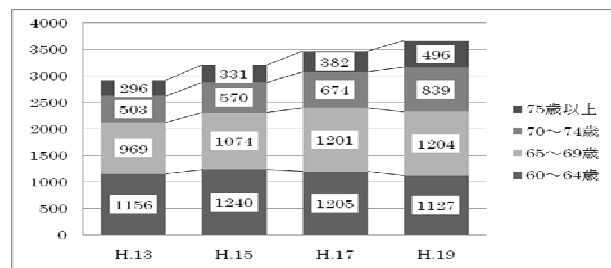


図2 寿地区に住まう60歳以上の高齢者の推移

2.3 公共の取り組み

行政の寿地区への取り組みは、街づくり、市民活動支援、高齢者支援、生活（保護）支援、女性・子供の問題、ゴミ対策等、多々ある。中でも生活保護は寿地区に欠かせないものである。寿地区の生活保護受給世帯数は5550世帯で、そのうち5093世帯は働いている者のいない世帯である。

2.4 新たな動きーNPO法人の活動ー

現在、寿町にあるNPO法人は「さなぎ達」「寿クリーンセンター」「空」の3つあり、どれも行政と関わりながら活動している。

3 寿町の歴史

3.1 ドヤ街以前の寿地区

現在の寿地区周辺は元々「南一つ目沼」と呼ばれた湿地帯だった。



図3 湿地帯だった寿地区

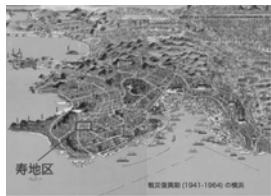


図4 1940年の横浜

3.2 寿地区の成立

- ・1945 年以前…県の官有地から貸付地として急速に市街化し、周囲をめぐる運河から水上運送に有利な材木屋各種の問屋が生まれ、港の後背地として輸出関係者、港湾労働者が集まる地域として大いに発展していた。
- ・1945 年の横浜大空襲で街は焼け野原となった。その頃住まう場を探していた在日朝鮮人が部落を作り始める。同年の7月に桜木町駅前（野毛）にあった横浜公共職業安定所が寿地区に移転、その影響で日雇い労働者が移住し始め、彼らをターゲットに在日朝鮮人のドヤの営業が始まる。10月に最初の簡易宿泊所「ことぶき荘」が誕生する事になる。
- ・1957 年…横浜公共職業安定所に続き、桜木町駅前（野毛）にあった横浜公共職業安定所横浜港労働出張所も移転し、業務を開始した。そして次第に日雇い労働者も桜木町から寿地区へと集まるようになり、次第にドヤ軒数も増えていった。



図5 1945年の寿地区



図6 1956年の寿地区



図7 1959年の寿地区

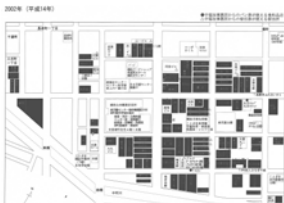
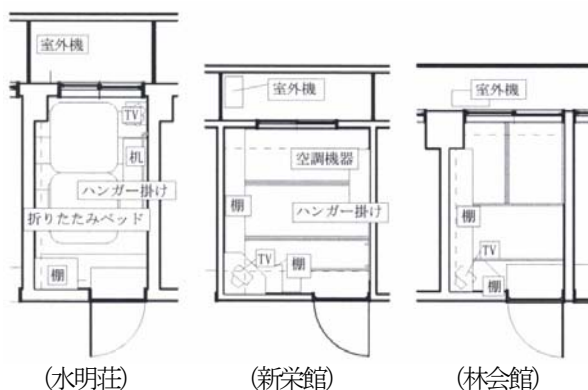


図8 2002年の寿地区

4 寿地区での生活実態

4.1 ドヤでの生活

寿地区にあるドヤの一部屋の大きさは大半がおおよそ3畳である。収納スペースがないため、ハンガー、棚が壁にむき出しになっている。どのドヤにもTVはある。空調機器は古いドヤには設置されていないところもある。



図面2 実測調査を行ったドヤの詳細平面 1/100



写真9.10 実際に生活している人の部屋の様子

4.2 住人の行動パターンと行動範囲

ここまで「1. 寿地区の現況調査」、「2. 寿地区の歴史」を外部的視点によって把握してきたが、ここではさらに内部的視点によって、住人を対象とした《行動パターンと行動範囲》の聞き取り調査を実施する事で住人の寿町での生活実態に迫る事を試みる。

3:00	起床、ゴミ出し
6:30	外出して朝食（伊勢佐木町）
8:00~11:30	ドヤの掃除
12:00	外出して昼食（伊勢佐木町）
14:00~18:00	ドヤの前で座り、他の住人と会話（週1回ことぶき診療所or 横浜市中央病院へ）
18:30	夕食の買い出し（食品館およびスーパー）
19:00	部屋で夕食
20:00~22:30	部屋でゴロゴロ or TV
23:00	就寝

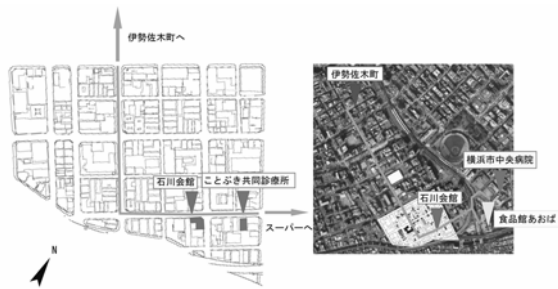


図9 60代無職の女性の1日の行動パターンと行動範囲

寿地区住人の朝はとても早く午前3時に起きる人もいる。日中仕事のない人でほぼドヤの中で1日を過ごす人は珍しい。大半は公園や図書館に行ったり友人と話をしに外出したりする。

5 他地域（主として山谷）との比較

外部的視点、内部的視点によって寿地区の現況を把握してきた。本章では他地域の現況についても目を向けたい。また日本三大ドヤ街（主として山谷地域）との比較を行うことによって、寿地区（ドヤ街）への見解をさらに深めていく。

5.1 他地域（主として山谷）との比較

山谷地域と呼ばれる範囲は1.65平方キロメートルもあり、寿地区の27倍以上もありドヤは広範囲に及ぶ。ドヤ軒数は山谷が162軒、寿町は122軒と、山谷は全体的に見て面積に対するドヤの密度は低い。ドヤは日本堤1丁目、2丁目、清川2丁目に集中しているため、密集した地域は寿地区同様ドヤが建ち並んでいる。山谷の街は日雇い労働者の住むドヤと一般住宅が雑居した地域であり、都道が走っている。また、ホームレスの姿が目立つ。

山谷の大半のドヤは華を脱いで上がる旅館形式になっており、玄関に個別の下駄箱がある。また寿地区のドヤとの一番の違いは、共同風呂があることである。写真11のように大きなドヤの浴槽は銭湯のように広く、住人同士のふれあいの場にもなっている。共同の炊事場はあるが、そこでは住人同士接触を避けているようだ。



写真11.12 大きいドヤの共同風呂（山谷のドヤ）



図面3 養気館 全体平面 1/600（山谷のドヤ）

6 まとめ

ドヤの一室は3畳が基本だが、実際には3畳で生活全てを許容する事は出来ず、必然的に生活の場を外部にも求めるようになる。したがって、路上はLiving化し、生活に必要な機能を街に依存しながら生活している。生活機能を街全体で共有する事で住人同士のコミュニケーションが生まれているのではない、様々な事情によって寿地区に流れ着いた他人同士の希薄な人間関係を繋いでいるように感じられる。また寿地区のドヤの料金はどこもほとんど変わらず、寿地区の住人は〇〇荘に住んでいる、××館に住んでいるという感覚ではなく、言わば「寿地区に住まう」というスタンスなのである。しかし路上がLiving化している一方で不法投棄や路上駐車など問題も山積しており、利用実態と現状とのギャップも伺える。現在NPO法人をはじめとして街を変えていこうとする取り組みが行われているが、こうした現状を改善していくには行政の協力が必要不可欠である。

本研究をするにあたって寿地区を訪れるようになった。当初の印象は警察、行政の手が入らない無法地帯で路上駐車や不法投棄によって荒廃した街、路上に用を足す住人がいる為に鼻につく臭気、路上で酒を飲む住人たち、そんな踏み込みづらい街なのだがそれだけではないどこか平和的で何とも形容しがたい不思議な印象があった。

寿地区が他地域に比べ、改善の手が加えられつつあり環境面で恵まれている事などもあるが、日雇い労働者の数や仕事数を比較して「現役の釜ヶ崎、老後の寿町、その間が山谷」と言われており、当初から抱いていた寿地区の「負のイメージだけではないどこか平和的で何とも形容しがたい不思議な雰囲気」は日雇い労働を引退し余生を過ごす高齢者たちが生み出すものではないかと考えられる、またそうした高齢者と子どもたちとの触れ合いが生まれている事がある不思議な雰囲気をつくっているのではないだろうか。